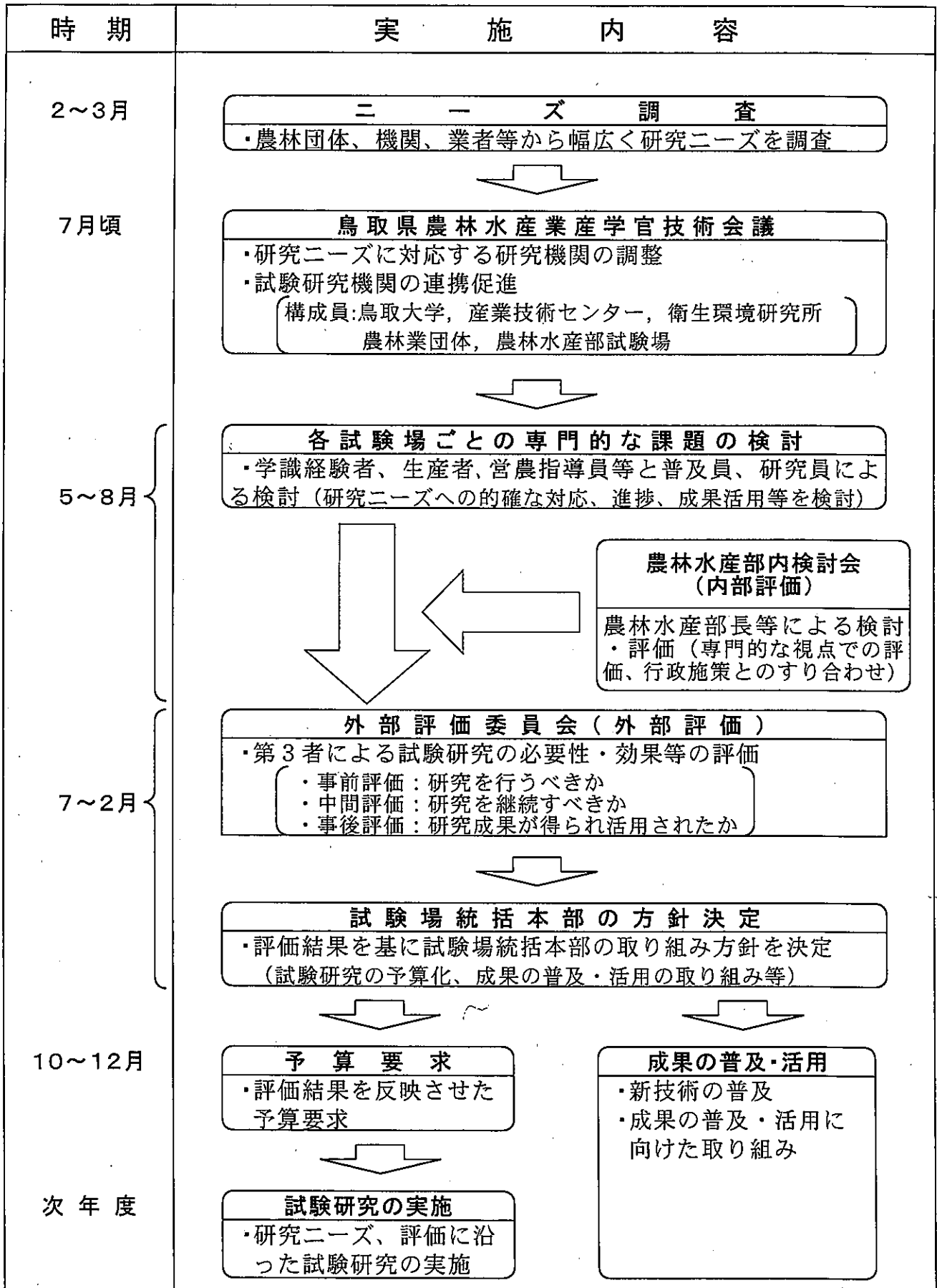


【別紙1】

農林水産試験研究機関における研究課題の
要望把握、実施に向けた検討・外部評価、予算化・研究実施 概略フロー



【別紙2】

農林水産部試験研究機関の試験研究に係る評価結果（平成27年7月30日実施）

とっとり農業戦略課

農業試験場		試験研究課題	実施年度	目的	評価結果	
事前1	転作野菜の導入を促進する排水等対策技術の確立	H28～H32	<p>近年の米価下落により、園芸作物も利用して水田営農の効率、収益性を高めようとする場面が広がっている。しかし水田転換畑では、排水不良などにより生産が不安定で、作型も限定されている。</p> <p>そこで、水田での園芸作物生産の安定化を目的として、ほ場排水性の簡便な診断手法を開発し、効率的な排水対策の確立を目指す。合わせて、大豆・飼料用トウモロコシを利用した有利な作付体系の構築を目指す。また、水田用機械を培土や防除等の作業に利用して、園芸作物をさらに省力、効率的に栽培できる体系を開発する。</p>	評点	11.8	
				判定	○	
	主な意見	<p>・基盤整備の条件、特に暗渠排水、それを補完するモグラ暗渠について、考慮すべきである。</p> <p>・農政の方向性と比較しながら、経営的に有利になるというメリットをもっとPRすべきである。</p> <p>・診断手法の簡易化と適正な方法の開発に期待する。</p>				
中間1	「ゆうきの玉手箱」技術確立事業☆Ⅱの重チャレンジ編	H25～H29	<p>「食のみやこ鳥取県」を推進する旗頭として、有機農産物の位置づけは非常に高い。しかし、県内における有機農業者数および生産面積は近年伸び悩んでいる。</p> <p>本事業は、他産業とも連携しつつ、有機栽培の面積拡大および安定生産につながる取り組みやすい技術メニューの確立・拡充および多様化する消費者ニーズに応えるための独自性の強い農産物(食材)の育成を目指し、「食のみやこ鳥取県」ブランドの推進において、特色ある農産物の生産販売の拡大に資する。</p>	評点	12.0	
				判定	◎	
	主な意見	<p>・生産物の差別化が、益々必要とされる中で、有機農業技術の確立はきわめて重要な課題である。</p> <p>・難しい有機栽培に取り組む人をしっかりサポートすべきである。</p>				

園芸試験場		試験研究課題	実施年度	目的	評価結果	
事前1	秋冬期に低コストで高品質化を実現する切り花安定生産技術の開発	H28～H32	<p>冬期の切り花栽培は、低温低日照下で開花が遅れる、切り花長が短くなる、花蕾数が減少する等、市場からクレームを受けている。EOD栽培は冬季低日照地域でも暖房コストを大幅に削減しながら、栽培期間の短縮や、切り花長の伸長などに効果的であることを明らかにしてきた。</p> <p>これまでの成果を基に、切り花の推進品目であるシンテツポウユリ、トルコギキョウ、ストックや、新たに見出した反応性の高い品目の、無加温栽培における高品質化法を開発して、生産者の収益性向上を実現に取り組む。(EOD栽培=End of Dayの略。日没後の短時間帯の、加温または補光栽培)</p>	評点	13.1	
				判定	◎	
	主な意見	<p>・研究対象品目の広がりによって、いろいろな分野で期待できる。しっかり研究すべきである。</p> <p>・早く農家に普及できるように、開発を進めるべきである。</p>				
事前2	‘ねばりっ娘’を核とする「砂丘ながいもブランド」強化に向けた栽培技術の確立	H28～H32	<p>園芸試験場が開発した‘ねばりっ娘’および砂丘ながいもは県中部を代表する「鳥取ブランド」の特産品であるが、両者とも品質の低下が近年問題になっている。また高齢化等により生産量も伸び悩んでいる。県外からの需要も多く、儲かる品目として農家の生産意欲も高い‘ねばりっ娘’を核に置き、鳥取県のナガイモ産地を盛り立て、ブランド力を強化する。</p>	評点	12.1	
				判定	◎	
	主な意見	<p>・砂地農業は肥料と農薬の問題が重要。消費者の関心が高い項目ばかりである。</p> <p>・近年の異常気象による影響も考えられるので、緊急性は高い課題である。</p>				
中間1	市場競争力のある鳥取オンリーワン園芸品種の育成	H18～H32	<p>本県園芸品目のブランド化を図り、「食のみやこ鳥取県」を推進していくため、本県独自の特徴ある品種を育成する。</p>	評点	12.8	
				判定	◎	
	主な意見	<p>・これまでの成果と課題が明確になっているので、継続して調査研究に期待する。</p> <p>・全体的に結果が出ていると思う。研究の狙いと目標がかみ合っている。</p>				
中間2	園芸産地を守る難防除病害虫防除技術の確立	H23～H32	<p>県内園芸作物の生産地では難防除病害虫が増加し、防除が困難であることから生産者は対策に苦慮している。これら難防除病害虫の防除対策を早急に確立し、園芸産地の維持を図る。</p>	評点	12.4	
				判定	◎	
	主な意見	<p>・難しい課題のみが残ってきており、解決も難しいケースが増えてきている。</p> <p>・永遠の課題ではあるが、農家としてはいつもお世話になっている。継続研究すべきである。</p>				

畜産試験場		試験研究課題	実施年度	目的	評価結果	
中間	「鳥取和牛オレイン55」の増産に向けた飼料給与試験				評点	12.0
				H25~H28		「鳥取和牛オレイン55」の増産に資するため新たな飼養管理技術(飼料給与方法)を検討する。また学校法人近畿大学との共同研究を進め、生体段階での牛肉のオレイン酸含有率を予測する生前診断法開発のための研究に取り組む。
		主な意見		<ul style="list-style-type: none"> ・えさの研究で効果が数値化されると、飼育方法や期間が大幅に変わる可能性があるため、必要な研究である。 ・研究は順調に進んでおり、多くの知見も得られ、適正である。 		

中小家畜試験場		試験研究課題	実施年度	目的	評価結果	
事前1	コンパクトで低コストな脱臭装置の開発				評点	12.6
				H28~H32		ガラス発泡材を用いた脱臭装置のコンパクト化による設置面積の低減、かつ、コスト低減への要望があり、他の脱臭方法とガラス発泡脱臭方法を組み合わせて農家施行等も可能となるような装置の開発等について、大規模装置を目指す県内企業との共同研究で取り組む。
		主な意見		<ul style="list-style-type: none"> ・脱臭が、ガラス発泡材で上手くいくのなら、非常に重要な技術となる。 ・コンパクト化により、普及が促進されると思うので、現場への還元すべきである。 		
事前2	「鳥取地どりピヨ」の改良試験 -「鳥取地どりピヨ」の性別体重格差改善を目指した種鶏改良-	H28~H32		「鳥取地どりピヨ」の父親となるシャモとロードアイランドレッドの交雑種鶏については、鳥取県独自の高品質な種鶏を目指して平成16年度から取り組んできた改良が平成27年度で完了する。一方、ピヨの雌の増体性能向上への要望があり、平成27年度完了する交雑種鶏群を維持しながら改良を進めてゆく。	評点	11.6
			主な意見		<ul style="list-style-type: none"> ・鳥取地鶏ピヨは他県の地鶏との差別化をしながらの研究を進めるべきである。 ・雌鳥の体重増加の要望に応えられるようしっかりとした研究を期待する。 ・飼養羽数の増加も検討すべきである。 	判定

林業試験場					
試験研究課題		実施年度	目的	評価結果	
事前 1	高齢広葉樹林(ナラ類、シイ・カシ類)の萌芽更新技術の確立	H28~H32	高齢・大径化したナラ類を主とする広葉樹林の萌芽力試験等を行い、広葉樹林を適切に循環利用する萌芽更新技術を開発する。	評点	13.1
				判定	◎
		主な意見	<ul style="list-style-type: none"> ・里山の保全、改善をすることは、人間にとっても動物にとっても環境を守る上でも急がれる課題である。 ・放置されている山の整備や林業の収益向上につながる重要なテーマである。 		
事前 2	特用樹木(トチノキ、クワ、コウゾ等)の効率的増殖技術の開発	H28~H30	里山や耕作放棄地での植栽・栽培が期待される特用樹木(トチノキ、クワ、コウゾ等)について、さし木による優良品種の効率的な増殖技術を開発する。	評点	12.9
				判定	◎
		主な意見	<ul style="list-style-type: none"> ・国産原料を使った地元ブランド化にむけ、また、里山の保全に向け、しっかりと調査研究すべきである。 ・生産者からのニーズが高く、また、専門性も高いので試験場の研究課題として適切である。 		
事前 3	県産スギ板材の表面処理技術に関する研究	H28~H30	スギ内装材のキズ発生を抑制できる表面処理技術(うづくり加工、表層圧密)を開発する。	評点	12.6
				判定	◎
		主な意見	<ul style="list-style-type: none"> ・スギ材利用に関する優秀な技術である。 ・他分野研究所とのコラボであり、お互いメリットが生かせるよい研究である。 		
事前 3	現場施工が容易なユニット式耐力壁の開発	H28~H30	スギ厚板を用いた耐力壁の施工の簡素化・効率化・工期短縮が可能な「ユニット式耐力壁」を開発する。	評点	12.9
				判定	◎
		主な意見	<ul style="list-style-type: none"> ・耐力壁のユニット化による作業効率化は、現場での活用を図るために必要な技術である。 ・従来成果の発展的な研究であるが、研究成果の提供は極めて効果が高いと思う。 		
中間 1	スギ一般大径材を活かした新たな心去り製品の開発	H25~H29	スギ一般大径材(並材)を使った芯去り角材の乾燥コストの低減、強度性能の評価等を行い、新たな芯去り角材の生産技術を開発する。	評点	12.3
				判定	◎
		主な意見	<ul style="list-style-type: none"> ・研究ニーズ等に変化はなく、着実に基礎データの収集はなされており、研究は順調に進捗している。 ・研究成果の提供による効果は高いので、今後は成果の普及に期待する。 		

水産試験場		実施年度	目的	評価結果	
事前1	白イカ高鮮度出荷技術開発試験	H28~H29	夏期の主要魚種であり観光資源としても注目されている白イカ(ケンサキイカ)について、活け締め技術を開発することにより、付加価値向上による生産者の経営安定及び、消費者に対する高鮮度品の提供で消費バリエーションの拡大を図り、白イカ資源の効果的な利用を推進する。	評点	13.3
		主な意見	・鮮度判定資料があると、消費者、流通業者との共通理解が進み、価格向上になる。 ・外観に頼っていた鮮魚判定から、数値的に鮮度を把握できれば、販売促進に期待が持てる。	判定	◎

栽培漁業センター		実施年度	目的	評価結果	
事前1	美保湾ヒトデ大量発生による資源影響調査	H28~H29	美保湾において平成26年秋以降ヒトデが大量発生し、漁業被害が発生している。この対策として以下の調査を行う。 ①ヒトデの効率的駆除方法についての検討 ヒトデの大量発生要因を検討するとともに、ヒトデの分布状況を時期別に把握し効率的な駆除方法を検討する。 ②栽培漁業対象種(バイ、ヒラメ)のヒトデによる被害実態の把握 バイ・ヒラメのヒトデによる被害実態を明らかにし、必要に応じて資源回復策を検討する。	評点	12.1
		主な意見	・ヒトデ発生の原因追究についても明らかにする努力すべきである。 ・ヒトデを有効利用できれば、漁業者が捕るので、結果的にヒトデは減少するのではないが。	判定	◎
事前1	サケマス類養殖技術支援事業(仮称)	H28~H30	①ギンザケ高水温耐性の獲得の検討(生産性の向上・出荷期間の拡大) 他魚種ではビタミンC等を添加したエサの投与により、高水温耐性の獲得が可能であることが知られている。同様にギンザケで高水温耐性の獲得を目指す。これにより、淡水飼育時には、夏の高水温時のリスク低減、淡水飼育期間短縮により、淡水飼育をする中山間地域の負担軽減が可能となる。また、海水飼育時には、海水馴致時の生残率向上及び出荷時期の拡大が可能となり、生産量の拡大及び生鮮魚の販売機会拡大が可能となる。 ②:三倍体作出技術の導入(周年提供可能な刺身用ニジマスの作出) 計画2:ニジマスにおいてすでに確立している三倍体技術を本県に導入するとともに、作出精度を向上する。これにより成熟により品質悪化(身ヤセ・色落ち)する秋~春に刺身商材を提供可能となり、新たな特産品づくりの可能性が開け、販売機会拡大が可能となる	評点	12.7
		主な意見	・不利な自然条件を技術によってカバーし、特産化することは大切である。ただし、自然破壊にならない配慮も必要である。 ・生産者へフィードバックすることで生産量の拡大につながるよい研究である。	判定	◎
中間1	キジハタ栽培漁業実用化支援調査	H25~H32	キジハタ放流はこれまで県の試験として実施してきたが、一部、成果が上がったことから、H28年度より漁協・漁業者が種苗代の一部を負担しての放流事業に移行する予定。キジハタ栽培漁業の事業化をさらに進めるため以下の支援調査を行う。 ①放流事業の費用対効果の算定および放流技術等の更なる改良などの支援調査 試験放流魚の混獲調査と移動定着の把握、回収率向上に向けた放流技術の改良および費用対効果(B/C)の算定を行う。 ②単個向上技術の開発と普及指導 ブランド化(40cm、1kg超)に向けた基準づくり(脂肪分など)及びエア抜き技術開発と普及指導を行う。	評点	12.6
		主な意見	・ぜひ、大型のキジハタを目標とすべきである。 ・費用対効果も検証し、漁業者に負担がかからないように進めるべきである。	判定	◎